学位論文要旨

# 国語科教育における価値目標論の形成と展開に関する研究

広島大学大学院　人間社会科学研究科　博士課程後期
教育科学専攻　教師教育デザイン学プログラム　国語文化教育学領域

皆 尾　賛

## 研究の目的・方法・意義

本研究は，国語科教育における価値目標論がいかに形成され，国語科教育の進展とともにどのように展開してきたのか，そしてその意味を，「読むこと」の教育を中心にして明らかにする研究である。

価値目標とは 1950 年代後半に輿水実によって提起された言葉である。この輿水の価値目標論の提起は個体史的に見ればその前時代的発想から批判的に捉えられてきたが，一方で今日においても用語として存在しており，含意は様々であるが用いられているものでもある。すなわち価値目標は輿水の一思想，一用語として解すのではなく，国語科教育を営む際における重要性をもった今日まで命脈のあるものだと捉えるのが正鵠を射ているだろう。本研究はこの価値目標論をめぐる歴史的経緯とその意味を明らかにすることを目指している。

「読むこと」の教育において，教材の内容や思想あるいは学習者の認識・価値観・世界観に触れないことの方が珍しいのではないだろうか。国語科は言葉を通して自己や他者，世界について扱う教科である。むしろ問題はそうしたものを「目標」として記述しようとすることの意味である。また，時代や論者によって「価値目標」と表現されるものの内実は多様である。

よって，本研究では以下三点の研究の目的を設定する。

１．価値目標論はどのような文脈でいかに形成されてきたのか。
２．価値目標論は国語科教育の進展の中でどのように同時代の国語科教育に影響を与えたのか。
３．国語科教育において価値目標論とはどのような意味をもってきたのか，もつのか。

本研究の方法としては，国語科教育において価値目標という言葉を導入した人物である輿水の言説を対象にし，彼がどのように価値目標論を提唱しそれを推し進めてきたのかを明らかにする。そして，同時代，価値目標論に対してどのような受容や批判があったのかを明らかにするために関連した領域や人物たちの言説との関係を考察する。

本研究は 1950 年代から 70 年代を中心とした国語科教育史研究の間隙を埋めるとともに，国語科特有とも言える価値目標論を考えていく上での歴史的な視座を獲得するという点で意義があると言える。

## 各章の概要

**・第１章の概要**

第１章では，国語科教育において価値目標を記述するように説いた輿水実の言説に着目し，価値目標論がどのように形成されたのかを 1950 年代の「人間形成」概念との間で考察した。

言語道具観であるとされた戦後新教育への批判は教材内容や文学教育の重要性の喚起として

「人間形成」の言葉をもって行われた。基本的には「内容」と「形式」で言うところの「内容」の喚起として受け止められたが，国語科教育の目的そのものを問い直す概念として様々な論者が自身の国語科教育観と重ねて国語科教育における「人間形成」を論じた。

輿水は当初，国語科教育における「人間形成」はことばの力を育むことであり，特定の世界観や人生観ではないと説明していたが，戦前師の垣内松三とともに親炙した国語科教育論，「人間形成」論への回帰から徐々に読むことにおける「内容」の重要性を説くようになる。表向きはアメリカの教育心理学者であるグレイによる「価値」と「技能」とに分けた読むことの目標論の整理の影響によって価値目標論を提起するが，そこには同時代の「人間形成」の議論が関与していた。輿水は自説を変更し，「人間形成」という抽象的な目的的概念に対して国語科における「内容」を包括する，価値目標と技能目標に分けるという具体的な枠組みを提起したのであった。ここでいう「価値」とは教材主義への復活という思潮と呼応することで，教材内容から導出されるものであるという性格が強かった。

**・第二章の概要**

第二章では，価値目標論の提唱と併せて唱導された機能的国語教育論とその具体化である基本的指導過程の同時代的意味を論じた。

機能的国語教育論は価値目標を主目標としそのための「内容」に技能を位置づけるという構造のものであった。戦後の国語科教育は技能が生活と結びつき発展的に学力を形成していくことが企図され，学力における「態度」の重要性が喚起されていたが，機能的国語教育論では技能が「内容」に位置づいており，技能が価値の獲得のためだけに用いられる構造になっているため，この「態度」面の志向が薄いものとなっていたといえる。機能的国語教育論を標榜する人物たちも「態度」の重要性は認めていたが，「生きてはたらく」というよりも基礎的な学力を確かにつけるという構造になっていたと言える。

そして，この機能的国語教育論が具体的な指導過程となったのが 1965 年の基本的指導過程であった。この基本的指導過程は戦前の三読法をベースにしており，だれもができる，ある程度できるとして打ち出されたものであったため，読解指導の方法に混迷していた 1960 年代にあって沖山光の読解指導論と結びつくなどして広がっていった。そして，その 2 年後に出されたのが「基本的教材」であり，これは「基本的指導過程を行うことが出来る」ということを一番に考えた教材論であり，読み取るべき文意と価値目標とが一点に結びつくことが重要だとされた。読み取るべき内容的価値と読みの方法とが直結していた基本的指導過程および基本的教材は基礎的な読みの能力の育成の習慣として広がっていった。

**・第三章の概要**

第三章では教材から導出された抽象的な価値観を内面化させようとする性格が強かった価値目標論は昭和 33 年版学習指導要領において特設された「道徳の時間」の授業との関係の中ではどのように位置づけられるのかということを考察した。

「道徳の時間」は特設された当初は生活指導的な側面があったが，文部省が資料集を全国に配布するなどして徐々に資料中心主義，価値主義的な傾向になっていった。1960 年代にそのことを推し進めたのは青木孝頼であり，青木は資料を通して「本質的な価値」を教える「価値の一般化」という方法を推し進め，1968 年には「基本過程」と称した指導過程を提唱することになる。ある教材，素材をもって抽象化された価値観を内面化させようとする目標観は価値目標と近似しており，同一の教師が国語科も「道徳の時間」も行う場合，国語科は読解指導を内容としつつ目標観としては同一のものが意識されたと考えられる。「基本的指導過程」も「基本過程」も「基本」が冠されており，こうした教師の読むことの教育における思考習慣が広がっていったと考えられる。

**・第四章の概要**

第四章では，1960 年代，価値目標論がどのように批判されたのか，その批判の内実を考察した。

日本教職員組合をはじめ，教育科学研究会国語部会や児童言語研究会は価値目標についてその意味をイデオロギー的観点から批判を行った。しかし，教科研の読み方教育は伝統的な三読法をベースにしており，客観的な読みを目指して「理想」を読み取らせようとするものであり，これは教材から導出された特定の社会的，抽象的な認識を学習者に読み取らせることを目標としていたものであった。これは価値目標論と近似しており，価値目標を批判しつつも同じ志向をしていたといえる。教材論に主眼を置かず，学習者の思考力の育成に主眼を置いた児言研は教科研と論争を行っているが，これは立場の違いを明確にしただけで生産的な議論にはなっておらず，教材を媒介として一つの価値観や認識を内面化させようとする読むことの教育は同時代の盤石なセオリーであったということができる。

**・第五章の概要**

第五章では，第四次学習指導要領において強調された国語科における読書指導の強調と価値目標論の関係について考察を行った。

読解指導一辺倒の現状を是正するために提起された読書指導の強調は，子どもの行動や性格に働きかけようとする指導性の強い読書指導を推進してきた阪本一郎には些末なものに映った。読書指導の強調は読解指導の関連を促しながらも，国語科における読書指導と読解指導の枠組みを明確にし，国語科の責務は読解指導，精読であるということを位置づけるとともに阪本のような目標観は価値目標論と読解指導の結びつきとして再確認された。また，価値目標という考え方自体は「国民性の育成」という物議を醸していた同時代の論点の中でも重要であることが確認され

た。しかし，言語技能の育成一辺倒への対処は 1970 年代の課題であり，価値目標論というよりも育むことばの力自体を問い直すという方向に向かって行った。

**第六章の概要**

第六章では,「落ちこぼれ・落ちこぼし」問題などから教育内容の精選が行われた第五次学習指導要領を中心に価値目標論の意味を位置づけた。

1970 年代, 国語科で育む力として思考力や認識力が目標として中心化されていったが輿水や森島久雄が価値目標の記述の重要性を説き続けるように価値目標の文言自体は引き継がれ,「何」を読ませるかということの意識化という点で重要視された。同時代の教科における訓育的教授においては教材内容による訓育, 教材内容を獲得するプロセスにおける訓育などが問われていったが, 杉山明男は同和教育を中心に西郷文芸学と関わりながら,「文学」による訓育的教授を推進していた。国語科における価値目標論とは，輿水が「内容」の重要性を認識するための「旗印」と呼ぶように，教育全体の訓育的側面と教科教育とを結びつける回路として位置づけることができる。特定の抽象的な価値観を内面化させようとする一方通行的な価値目標論から今日では「ものの見方・考え方」の目標と広くとられ，今日においてもその用語は命脈を持っている。

**研究の総括**

1950 年代後半に輿水によって提唱された価値目標, また本研究で扱った同時代のそれをめぐる動向というのは，一つの教材をどのように理解させるかという枠組みのもとで志向されてきたものだということが指摘できる。これは戦後新教育において推進された単元学習の衰退とその意義の再検討という時代の変遷の間隙とも呼応することである。すなわち，国語科が扱うのは言語それ自体ではない，ということはどの時代においても言われ，基本的に共有されてきたことであったが 1960 年代の教材主義的な時代において国語科における「内容」との関わりを担保する役目を価値目標論は担っていたと同時に，そこに教師側の「読むこと」の教育を通した価値観や認識に対する意図性が表れていたと言えるだろう。そしてそれは様々な受容や批判を通して国語科教育の進展に寄与していた。

現在では幅広いものとなっている価値目標であるが，幅広いのであればそれは教科における訓育として捉えればよいことで，また「内容」との関わりで言えば単元学習などの蓄積がある。価値目標の記述の意義をあえて述べれば，価値目標というのは指導目標であるので，記述することによって教師側の「読むこと」の教育の成果としてどのようなことを考えさせようとしているのか/させてしまうのかという部分が明らかになり, 授業が公共のものとなるという意義があるだろう。ただ，こうした意義を踏まえても改めて価値「目標」なのかというところは疑念が残るところであり，今後価値目標論の議論が俟たれる。